

## フォーレのレクイエム

藤原 道夫

友人や知人の訃報に接するたびに、フォーレのレクイエムを聴く。昨年から今春にかけても何度か聴いた。静かに、穏やかに、そして優しく曲が流れてゆく。宗教的なことを抜きにして故人のご冥福を祈るとともに、自分の心を落ち着かせるのにぴったりな曲に思える。そう、レクイエムは「安息を」という意味からきているのだ。

レクイエムはカトリック教会で歌われるミサ曲の一様式で、決まったラテン語の歌詞に曲がつけられている。**入祭唱・キリエ**に始まり、**奉獻歌・怒りの日・涙の日・聖なるかな・祝福されますように・神の子羊・楽園へ**と続く（一部省略）。多くの作曲家が曲を付けているなかで、モーツァルト、フォーレとヴェルディの作品がよく知られており、それぞれに特徴がある。モーツァルトの曲では**入祭唱、怒りの日、涙の日**が印象深い。ただし自身が作曲したのは最初の部分のみ。ヴェルディの曲では何といても**怒りの日**が有名、合唱とトゥッティで強烈な音を創りだし「死者よ、甦れ！」といわんばかりに響きわたる。これらに対してフォーレの曲では**怒りの日**も**涙の日**もなく、最後の**楽園へ**と進む。ここにフォーレの亡き人への思いやりを感じる。この心休まる楽章はモーツァルトにもヴェルディの曲にも無い。

フォーレの音楽を知ったのは高校時代の同級生 M 君のお陰だ。地方都市としては珍しく、彼の家には出たばかりの LP レコードが何枚もあり、それを大事そうに開発されて間もない LP プレイヤーにかけていた。まずはベートーヴェンやチャイコフスキーの名曲を教えてもらった。フォーレの曲も聴いた筈だが、印象に残っていない。彼の使っていた LP プレイヤーが私のオーディオへの関心の出発点となった。実際に手にするのはずっと後のことになる。

「フォーレのレクイエムを自分の葬儀に際して流したい、そのために曲を編集している」と言う人がいた。その方は数年前に亡くなったと聞き及んだが、希望は叶えられただろうか。

M 君は大分前に亡くなった。葬儀の際にフォーレのレクイエムは流されていなかったが、納骨後の会食の際にフォーレの管弦楽曲「パヴァーヌ」が鳴っていた。この優雅で洒脱な曲を彼は愛聴していたのだ！

訃報に接してフォーレのレクイエムの CD を手にしながら亡くなった方を偲ぶとともに、M 君のことも懐かしく思い出す。